

## 今次のプロジェクトの背景と目的

言語教育情報研究科長 松田 憲

はじめに

立命館大学では、2010年度に研究基盤を強化する取組の一つとして、研究推進強化施策を発足させることになった。この施策は、学部・研究科等の研究機関に対して、これまでの蓄積してきた研究の成果を踏まえて、研究の基盤を一層強化できるような新しい研究プロジェクトの提案を募集し、審査の結果採択されたプロジェクトに対して助成を行うものであった。言語教育情報研究科も、教授会での数次の議論と検討の結果、以下のような研究の総括のもとに、2つのプロジェクトを申請し、幸いに採択されたので、このプロジェクトの1年間の達成の結果を成果報告することにした。以下は、このプロジェクトの申請するにあたっての背景説明とプロジェクトの目的を説明したものである。

### 1. 本研究プロジェクトの背景

言語教育情報研究科が対象とする研究領域は、英語教育、日本語教育、言語情報コミュニケーション領域であるが、所属教員のより個別的な研究分野は、応用言語学、応用音声学、言語習得と喪失研究、言語評価法やテストング、年少者英語教育、日本語教育学、日本語学、バイリンガリズム、コーパス言語学、e-LearningやCALL、語用論と談話分析、コードスイッチング、政治言語、異文化コミュニケーション学、等々と多岐にわたっている。しかし、これまでの研究のうちの大括りできる特徴としては、以下のような分野、項目をあげることができる。

#### (1) コーパス言語学領域の研究拠点を形成するとりくみ

言語教育情報研究科は、研究科発足時点より、英語および日本語のコーパス関連の研究者リソースを集約した研究科としての特色を持たせてきており、英語コーパス学会の会員を中心に、院生を研究協力者として、当該学会はもとより、本学の国際言語文化研究所におけるプロジェクト研究などにおいて共同的な研究を進めてきた。その成果は、国際言語文化研究所の紀要『言語文化研究』16巻4号、17巻2号、4号などの特集として公刊されている。

また、2007年からは、文部科学省科学研究費基盤研究Bにおいて、『アジアの英語教科書コーパスの構築と相互比較』というテーマで採択され、2009年度末には大部の成果報告集の公刊を行った。この共同研究には、研究分担者として言語研教員6名、学外研究者1名、研究協力者として学外研究者3名、言語研院生3名が参加して本研究科のコーパスサーバーから成果の公開をしている。

日本語教育の分野では、コーパス作成と、談話における第二言語習得研究などが進められており、日本語コーパスに関わる分野では、長年『青空文庫』の編集に関わってきた教員をはじめ、日本語の話し言葉・談話の分析を専門とする教員を中心に、本研究科の修了生を研究協力者にして、日本語の会話コーパスの作成と公開の取組を進めている。今年度は、この分野の研究を更に進める計画である。

## (2) 言語習得・喪失研究・バイリンガリズム研究

第2言語や外国語としての英語習得研究は日本国内外で多く行われているが、本研究科ではその成果を直接教育現場に還元できる研究を進めてきた。また、言語習得を言語面に限ることなく、その背後にある文化面にも注目し、日本における継承語教育や帰国生教育を含めたバイリンガリズム研究にも取り組んできた。英語教育の分野では、小学校の英語教育やその中学校への連携の部分についての研究が進んでいる。湯川笑子教授他の『小学校英語で身につくコミュニケーション能力』（三省堂 2009年）、本研究科の修了生との共著論文「英語専科教員および担任による絵本読み聞かせ」（『小学校英語教育学会紀要第10号』2010年3月）、本研究科の学生、修了生をインターンシップ生として指導し小学校の英語教育法について、実験開発した成果をまとめた『京都朝鮮第3初級学校の英語教育 2009年度における英語指導案、教材と成果』（2010年3月）他、研究科生、修了生とともに進めている中学校1年生の動機付けの研究がある。

また、英語教育と日本語教育共通の基礎理論の土台形成のための活動として、バイリンガル教育（特にニューカマー児童・生徒や継承語教育）に関して、トロント大学名誉教授の中島和子氏の講演会を実施し、母語・継承語・バイリンガル教育学会の年次大会を共同開催した。更に（病理に起因しない）言語喪失研究を進めることで、言語習得メカニズムの解明及び効果的な第2言語習得法の開発を目指す、非常に独創的な研究も湯川笑子教授・田浦秀幸教授により行われてきた。今年度は、小中学校における英語指導法とともに、国際高校の生徒を対象に、言語認知脳科学分野の知見を活用した臨床研究にも取り組む予定である。

## (3) 言語コミュニケーション学、政治言語分野の研究

この分野を専門にする研究者は多くないが、コミュニケーション学会を中心にした研究を進める教員のほか、最近メディアでも注目されている言語力、とりわけ政治家の言語分析（フレーミングやポライトネス理論、レポート・トークとレポート・トーク）などで活発な研究成果を上げてきた東照二教授の研究活動などは、本研究科の特色ある研究成果である。公刊された成果としては、最近のものだけでも、『人を惹きつける「ことば戦略」』（研究社）『歴代首相の言語力を診断する』（研究社）『言語学者が政治家を丸裸にする』（文藝春秋）『オバマの言語感覚』（NHK

出版)『はじめて学ぶ言語学(大津由紀雄編)』(ミネルヴァ書房)など多数にのぼる。

#### (4)e-Learning や CALL の分野の研究

言語研は、e-Learning や CALL の分野の研究者を一定数抱えていることも1つの特徴となっており、この分野の研究者は、CIEC という学会を中心に研究活動を進めている。年次大会や全国レベルの研究大会には、積極的に院生や修士生に研究発表をさせ、若手研究者の育成にも努めている。最近の研究成果としては、他大学の研究者と共同で公刊した『ICT を活用した外国語教育』(東京電機大学出版局)や、コンピュータと教育に関わる多くの研究者と共同で公刊した『学びとコンピュータ ハンドブック』(東京電機大学出版局)などがある。こうした成果の中には、オーストラリアの大学(USQ)の協力を得て、インターネット上の仮想空間を利用した言語教育の可能性の研究も含まれており、今後の研究の進展が期待できる。

## 2. 今プロジェクトの目的

すでに上記の項で述べたように、本研究科の研究上の特色は、英語および日本語コーパス言語学、英語および日本語を中心とした言語習得研究・バイリンガリズム研究、日本語教育学、言語コミュニケーション学、政治言語分野の研究、e-Learning や CALL の分野の研究と、多分野にまたがるが、今次の研究プロジェクト申請にあたって、全体を統合する用語として「言語科学」を1つのキーワードとして一層の研究の進展をはかることにした。言語科学の概念は、従来の理論言語学を含むだけでなく、言語教育など応用言語学や社会言語学の分野は当然含まれるが、さらに言語学と認知科学の学際的な研究分野、また脳科学や言語障害学といった分野の研究とも関わって一層学際的な性格を強めている。事象関連電位の測定やfMRIの利用、またfNIRS(機能的近赤外線分光法)による脳機能のイメージング(光トポグラフィ)など、脳の可視化技術を応用して脳内の活動をリアルタイムで観察することによって、言語習得のメカニズムを新たな視点から解明する研究や、これを効果的な外国語学習研究に応用するなど、新たな研究が進められてきている。言語科学分野の研究としては、この他に、本研究科で研究実績を持つ小中学校における年少者児童への英語教育・指導の実践的な課題に結びつけた研究や、コーパス言語学の研究蓄積を一層進展させるための日本語会話コーパスの作成と談話分析、日本語習得研究などを含めた総合的な言語科学研究を、今後推進していくことにしている。本研究科は、こうしたテーマを言語科学の総合的な研究と位置付けて、言語に関わる文理融合の広域の研究拠点を確立するため、今回の研究推進強化の取組を機に、「言語の発生、進化、獲得、習得、機能」を学際的、総合的に研究することのできる研究拠点を狙いたい。こうした研究拠点は、残念な

から規模の大きな国公立大学法人を中心に行われており、私学での実績は極めて少ないのが現状である。本研究科は、今次の研究推進強化の取り組みを基点に、この言語科学分野の研究センターの設立を中期的な目標に設定しながら、本年度はまず、「言語科学研究室」としての機能を研究科の中に配置することを目標にしたい。すでに述べたように、この分野は極めて学際性が高く、他分野の研究者との共同が不可避であり、研究者のネットワークも東京圏が1つの拠点となっており、また大規模な研究施設を必要とすることが多いので、当面はある程度研究のターゲットを絞りながら、本学の東京キャンパスも有効に活用して遠隔システムを活用した研究者間の共同研究体制を組むなど、有機的、多角的な研究スタイルを追求する必要があると考えている。

要約すると、これまでの言語と情報、教育に関わる本研究科の研究のスコープと水準を引き上げ、先端的、国際的な研究動向にも射程を合わせて、「学際的な言語科学の研究拠点づくり」の第一歩となるように、今次の研究推進強化の政策を位置づけたいと考える。

### 3. 今年度開始する2つの個別プロジェクトの概要

今次の研究助成が当初は単年度のものである点を考慮して、プロジェクト課題を2つに絞り、このテーマのもとに、全体が「言語科学研究室」の研究活動となるように計画した。具体的なプロジェクト研究の目標、方法、成果などは、本論集において、個別の研究報告や論文として掲載しているが、ここでは、概要のみ以下に示すことにする。

#### 脳科学による言語処理メカニズム解明研究：言語保持と喪失

このプロジェクトは、本研究科の研究政策の中軸となる言語科学研究の中核的な役割を担うプロジェクトである。そのために、研究者の組織や共同研究会の有機的・多角的組織のために、遠隔テレビ会議システムを研究分野でも有効に活用するノウハウを蓄積し、また脳科学の視点から言語習得・保持・喪失を計測する機器の利用（レンタル使用）を必要とする。

表記のコアとなる研究は、大阪の国際高校との共同研究として、出生時より2言語に触れてきた早期日英バイリンガル（国際学校在籍者や帰国生）を対象として、非常に高いレベルのバイリンガルが単言語圏でどのように2言語を習得・保持・喪失するのかに関する研究を行う。当面、東京圏の研究者との協働を円滑に進めるため、また本研究プロジェクトの拠点を確立するために、創思館305室を暫定的な言語科学研究室と位置付け、大学の遠隔テレビ会議システムによる共同研究を進めるとともに、より安価で簡便な、遠隔テレビ会議システムの導入の条件を探ることとする。また、プロジェクトの円滑な実務上のマネージを進めるために、アルバイト

の補助員を雇用する。

#### 日本語教育研究のためのコーパス構築とその応用

今年度の本プロジェクト研究の重点は、日本語教育研究への応用を目的とした日本語会話コーパスを作成し、それを利用した研究手法の開発である。言語教育、言語研究において現在、コーパスを使った実証研究が大きく進展しようとしている。本研究では(1)日本語教育研究への応用に目的を絞り、記録情報を吟味して選定し、だれにも使いやすく、取り回しのよいサイズの日本語会話コーパスを作成するとともに、(2)日本語会話コーパスを利用した実証研究の方法を提示し、日本語教育研究の新しい手法を開発する。昨年度開発した日本語母語話者の会話コーパスを発展させ、日本語母語話者と学習者の会話コーパスの作成・応用を目指す。

本プロジェクトでは、これまで蓄積してきたコーパス言語学分野の研究を安定的に発展させるため、言語科学研究室に研究補助員(アルバイト雇用)を配置するとともに、研究科全体のプロジェクト成果発信のための論文集である『言語科学研究』の編集と発行を行い、コーパス関連分野の研究拠点の形成を目的とする。